

乳幼児のスマートフォン使用の現状と保護者の意識からみる課題と今後の取り組み

桧垣 淳子

Current Status of Infant's Smartphone Usage and the Guardian's Consciousness — Problems and Future Approach —

Junko Higaki

(2017年11月22日受理)

はじめに

平成29年版情報通信白書⁽¹⁾によれば、平成22年に9.7%だったスマートフォンの保有率は平成28年に71.8%となり、ここ5～6年で急速に普及していることがわかる。この急増の要因は、どこへでも手軽に持ち運べるといった携帯性と電話、メールの他、ネット検索、ショッピング、SNSの利用、動画視聴、ゲーム、さらに写真を撮る・見るが可能であり、何でもできるといった利便性にあると考えられる。今や情報通信端末の利用は、パソコンからスマートフォンへとシフトしつつあるともいわれており⁽¹⁾、私たちの生活に欠かせないツールとなっている。

大人の保有率の急増に伴い、使用の低年齢化も進んでおり、1歳児の約4割、3歳児の約6割に情報通信機器の利用経験があるとする結果も報告されている⁽²⁾。このような社会状況の中で懸念されているのが、スマートフォン使用による弊害である。乳幼児が長時間接することにより心身の成長に悪影響を与えるとして、2014年、日本小児科医会⁽⁴⁾は「スマホに子守をさせないで」という啓発ポスターを作成し、保護者らに乳幼児期の長時間の利用を控えるよう注意を呼びかけた。それによると、乳幼児期のスマートフォンの長時間使用は、親が子どもの反応を見ながらあやすといった親子の交流や他人とのコミュニケーションの機会の減少により、コミュニケーション能力の低下に繋がると指摘されている。また、視力低下、実体験の減少により五感を育むことが阻害されるといった問題も挙げられている。さらに、親がスマートフォンに夢中になり、乳幼児が出すサインに適切に気づけないなど保護者の使い方による問題も指摘さ

れている。

しかしその一方で、子どもが一時的に使用することによって、家事で手が離せない時など一人で遊ばせることができる、外出時に子どもを静かにさせることができるなど、親の育児負担を軽減できるツールとして役立つという声も聞かれる。

スマートフォンは、ここ5～6年で急速に普及しており、現在、0～5歳の子どもの持つ保護者は、子育てにスマートフォンがある初めての世代とも考えられ、子どもの使用に関しては手探りの状態にあると思われる。パソコンとは異なり、小型で携帯性に優れているスマートフォンは、時間や場所を問わず使用が可能であり、子どもでも簡単に操作することができる。そのため、長時間使用につながりやすく、使い方によっては問題になる可能性がある。

そこで、本研究では、0～5歳の子どもの持つ保護者にアンケート調査を行い、乳幼児のスマートフォン使用の現状及び保護者の意識を把握することにより、その背景にある課題を抽出し、今後、必要な取り組みを明らかにすることを目的とした。

調査方法

1. 対象者

福岡市の私立保育園1園、及び朝倉市の私立保育園1園に通う未満児、年少、年中、年長クラスの子どもの保護者233名、福岡市の私立幼稚園1園、及び朝倉市の私立幼稚園1園に通う年少、年中、年長クラスの子どもの保護者105名、計338名を対象とした。アンケートの配布数は440、回収数は359であり、回収率は81.6%、で

あった。その内、未記入、記入もれを除く有効回答数は338である（有効回答率は94.1%）。対象者は、20代が6.2%、30代が65.7%、40代が27.8%、50代が0.2%であった。就労形態は、フルタイム49.1%、パートタイム22.5%、専業主婦20.7%、その他7.7%、スマートフォンの所持率は95%であった。

2. 調査方法および期間

調査は、質問紙による自記式無記名で実施した。調査期間は、平成27年7月16日～8月6日、平成28年7月1日～7月15日とした。

3. 調査内容

対象者の属性については、性別、年代、就労形態、及びスマホ所持の有無、使用時間を質問した。調査内容は、乳幼児のスマートフォン使用の現状を把握するために、子どもの年齢、性別、子どもの使用の有無、使用開始時期、誰と使用しているか、使用頻度（一日あたり、平日、休日）、よく使用する機能、使用する場面、使用に際してのルールを設問とした。また、保護者の子どものスマートフォン使用に対する意識を把握するために子どもの使用に対する気持ち、子どもの使用に対して気にしていること（懸念する点）を設問とした。「子どもの使用に対して気にしていること」に関しては、4件法（気になる、やや気になる、あまり気にならない、気にならない）を用いた。尚、兄弟がいる保護者には、長子に関して回答をお願いした。

調査結果

(1) スマートフォン使用の現状

図1に示すように、0～5歳までの子どものうち72%がスマートフォンを使用していた。年齢別では、0歳10%、1歳37.1%、2歳65.1%、3歳74.7%、4歳80.3%、5歳88.9%であり、年齢を追うごとに使用率は増加していた（図2）。誰と使用しているかでは、「大人と一緒に使用することが多い」が67.8%、「子どもだけで使用することが多い」が32.2%であった。一週間あたりの使用頻度は、「ごくたまに」が46.6%、「週1, 2回」が25.9%であり、週1, 2回以下の使用が約7割を占め、「ほとんど毎日」使用するのは13%であった（図3）。平日の使用時間は、「15分未満」が40.7%、次いで「0分」(24.8%)、「30分程度」(14.4%)であり、約9割(89.5%)は30分以下の使用時間という結果になった（図4）。平日に1～2時間程度使用する割合は、約10%であった。休日は「15分未満」が40.2%から52.2%と平日より11.5ポイント増加し、「0分」は

24.8%から8.7%と平日より16.1ポイント減少した（図5）。「30分以下」の割合は5.2ポイントと減少し、1～3時間程度使用する割合が4.3ポイント増加しており、休日の方が使用する子どもの割合が増え、時間が長くなる傾向にあった。

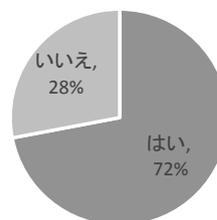


図1 子どものスマートフォン使用の有無 n=321

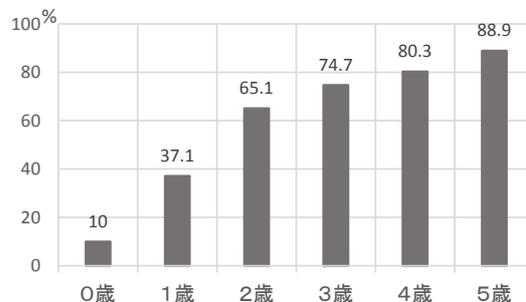


図2 年齢別のスマートフォン使用率 n=321
0歳児 10 1歳児 35 2歳児 63 3歳児 75 4歳児 61 5歳児 83

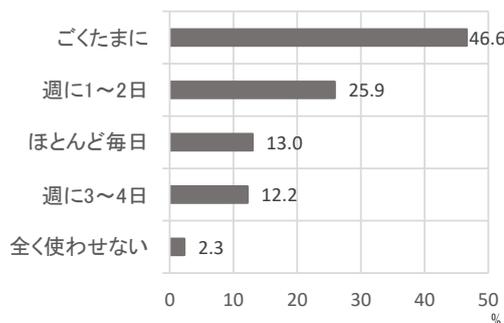


図3 1週間あたりの使用頻度 n=262

よく使用する機能としては、「写真を見る」が全体の63%と最も多く、次いで「動画をみる」(54.2%)、「写真を撮る」(44.7%)であり、スマートフォンを使って見る、撮るが約半数以上占めた（図6）。使用する場面は、「子どもが使いたがる時」が46.2%と約半数を占め、次いで「親が家事などで手が離せない」(19.1%)「子どもに静かにしてもらい時の最後の手段」(18.3%)「乗り物・公共機関での移動時間、外出先での待ち時間」(17.9%)となった（図7）。使用時のルールとしては、「使う時間の長さを決めている」(39.3%)、「内容を決めている」(36.3%)と回答した保護者が約

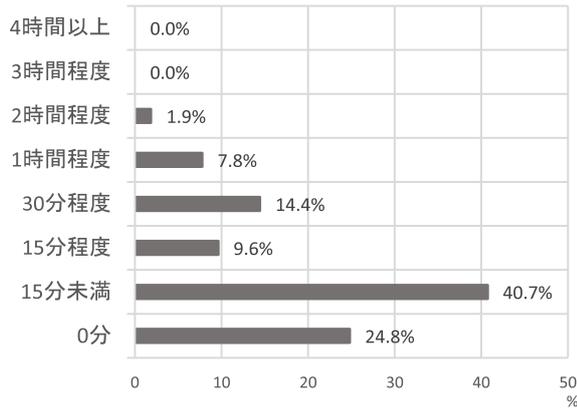


図4 平日の使用時間 n=269

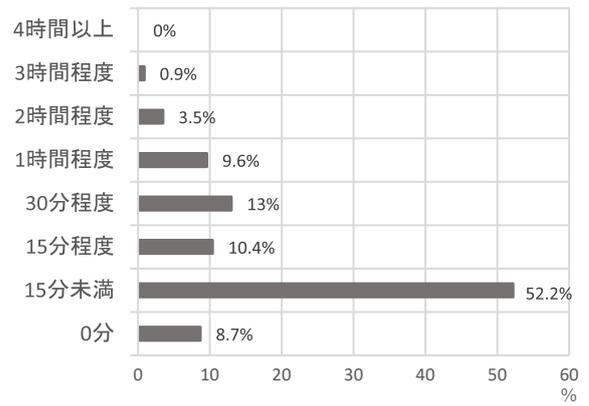


図5 休日の使用時間 n=230

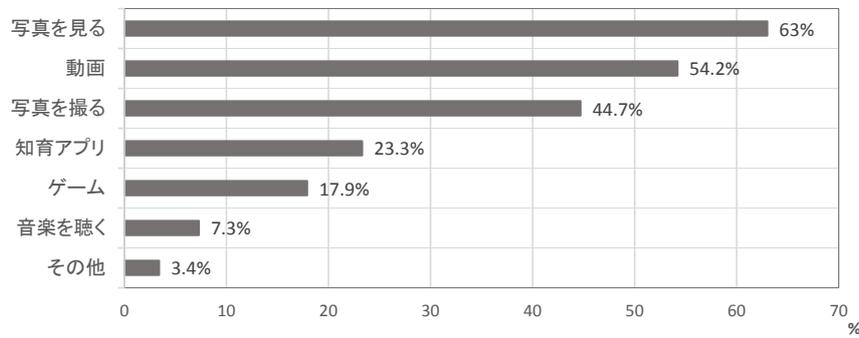


図6 よく使用する機能 (複数回答) n=262

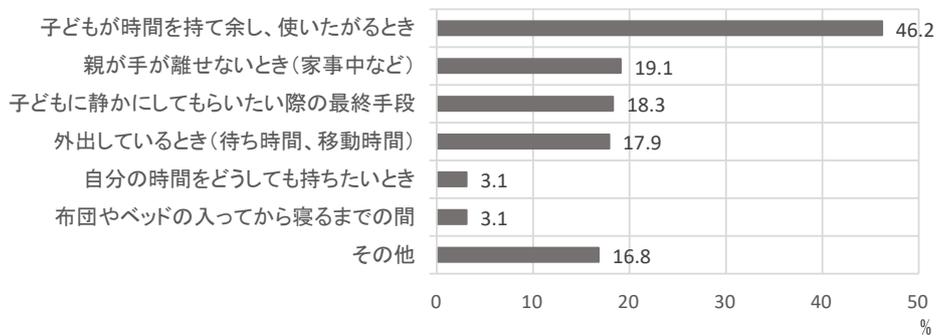


図7 スマートフォンを使用する場面 (複数回答) n=262

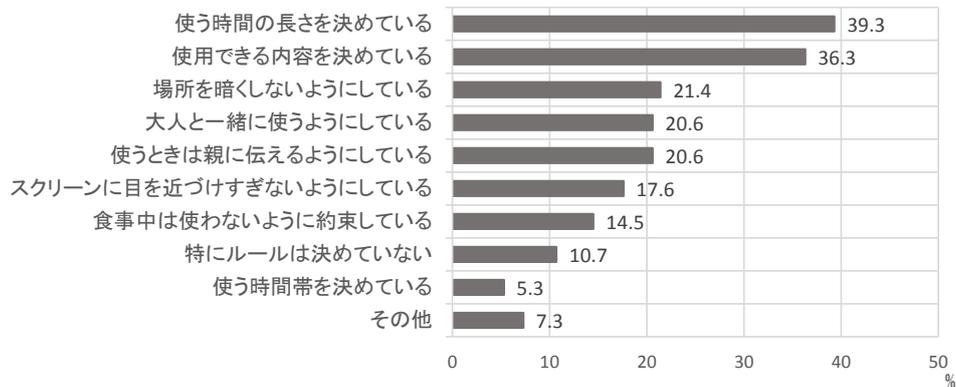


図8 使用時のルール (複数回答) n=262

4割を占め最も多かった(図8)。次いで、「場所を暗くしない」(21.4%)、「大人と一緒に使用する」(20.6%)、「親に伝えてから使用する」(20.6%)、「スクリーンに目を近づけすぎない」(17.6%)と続いた。

(2) スマートフォン使用に対する保護者の意識

子どもが使用することに対する保護者の気持ちを図9に示した。「やりすぎはよくない」と考えている保護者が74%、次いで「視力が低下しないか心配である」(46.2%)、「子どもだけで使うのはよくない」(33.6%)と続いた。16%の保護者が、「まだ、影響がわからないので心配であると考えている」と回答した。

図10は、「子どもがスマートフォンを使用する際に気になること(懸念している点)」を示した。最も多かったのは、「長時間の視聴や使用」であり、95.3%の保護者が気になる、やや気になる、あまり気にならない、気にならないと回答した。次いで、「視力の低下」(92.3%)「夢中になりすぎる」(89.7%)、「大きくなった時の依存」(78.2%)と続いており、約8~9割の保護者が身体への影響や将来にわたる依存を

気にかかるという結果となった。

考 察

1. スマートフォン使用の現状

(1) 使用率、頻度、時間

本調査では、乳幼児の約7割がスマートフォンを使用しており、年齢を追うごとに使用率は増加していた。先行調査⁽²⁾⁽³⁾においても6歳までは年齢とともに使用率が増加しており、乳幼児のスマートフォン使用は一般的になっていると推測できる。各年齢の使用率は、総務省調査(2015)⁽²⁾と比べると、2,3歳児で約30~40ポイント、4,5歳児で約40~50ポイント本研究の方が高い結果であった。サンプル集団の特性の影響も考えられるが、「子どもたちのインターネット利用について考える会」の調査(2016)⁽³⁾においても、総務省調査より0才児で10ポイント、1~6歳で20ポイント以上高くなっており、低年齢での使用はさらに進んでいると推察できる。使用率は高いが、

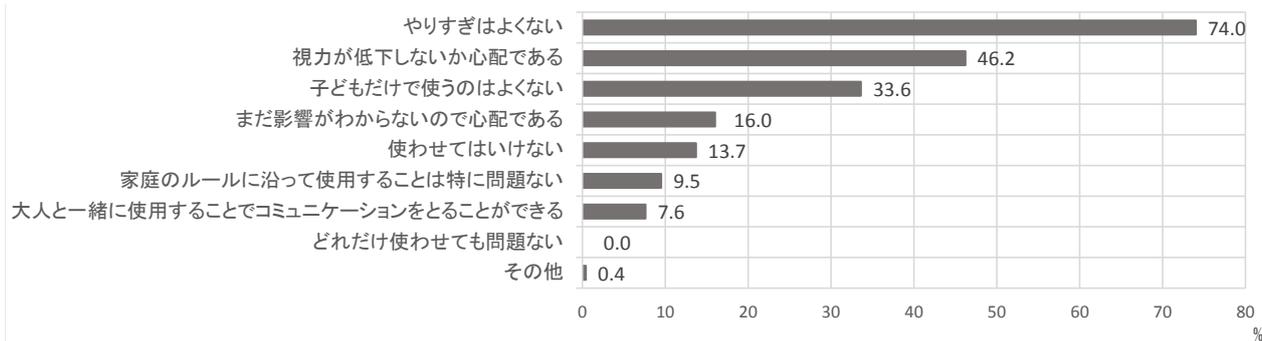


図9 子どもスマートフォン使用に対する保護者の気持ち(複数回答) n=262

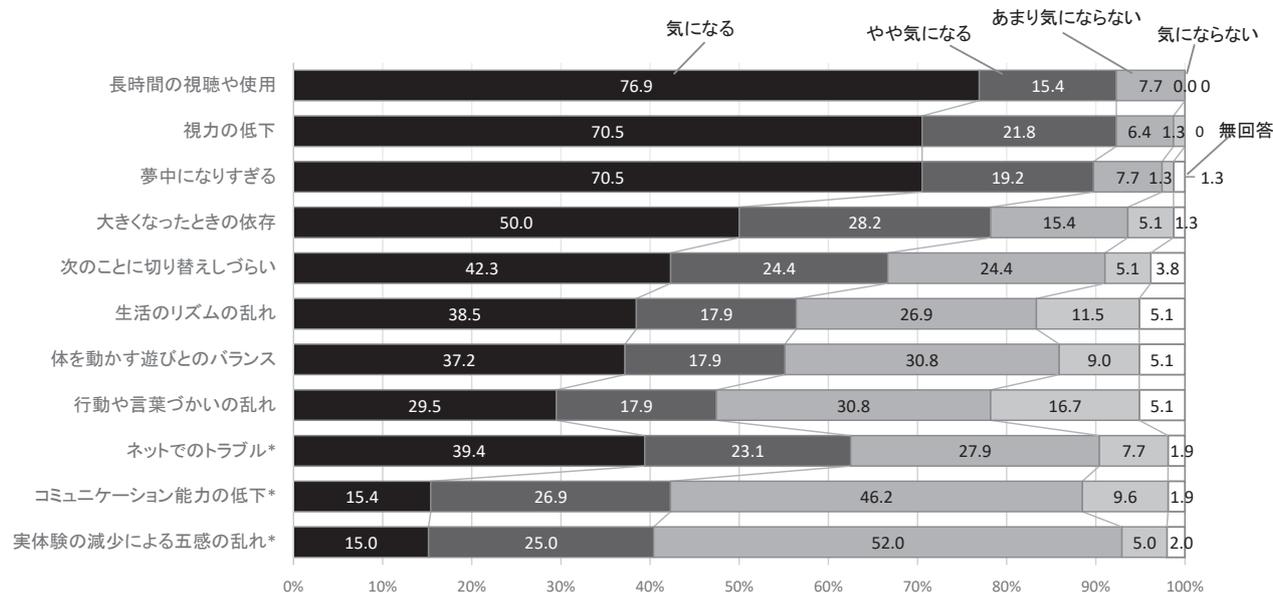


図10 子どもスマートフォン使用で気になること n=264 n*=143

全体の7割は週に1, 2回以下の使用であり、「毎日必ず」「ほぼ毎日」が5割を占めていた先行調査⁽²⁾⁽³⁾に比べ、一週間当たりの使用頻度はそれほど高くないことがわかった。平日も「使用しない」が約25%おり、全体の9割は30分以下の使用である。結果で述べたように、本研究における保護者の95%以上は、子どもの長時間使用や夢中になりすぎることで、スマホ依存になってしまうことを不安視しており、使用頻度や時間に関して留意していると推察できる。保護者の意識が、子どもの使用時間に反映した結果と考えられる。

平日に比べ、休日は使用する割合、時間ともに増加傾向が見られた。これは、家で過ごす時間が長くなることや、外出先で使うことが生じたためと考えられる。

(2) よく使用する機能

主な使用機能は、写真や動画を見る、写真を撮るであった。写真を見る・撮るは、ネットに接続しなくても使用が可能であり、安全かつ手軽に子どもの興味をひくことができる使用方法であると考えられる。総務省調査⁽²⁾においても、動画を見る(67.9%)、写真を見る(55.1%)・撮る(38.3%)が上位であり、本研究も同様の結果となった。最近では、スノーなどに代表される画像の加工も手軽にできるため、今後も写真を見る・撮る機能の使用は増加すると予想される。知育アプリの使用が多いのではないかと予測していたが、全体の2割程度であり、総務省調査(0~6歳の知育アプリの利用は約4割)と比較し少ない傾向であった。

(3) 使用させる場面

約半数の保護者が、「子どもが時間を持て余して使いたがる時」に使用させており、2割の保護者は、子どもの相手をできない、あるいは静かにしてもらいたいなどの場面で使用させていた。良くない思いながらも手軽に、あるいはやむにやまれず使わせている保護者の姿がうかがえる。その一方で、子育て中の保護者にとってスマートフォンは、外出時や静かに過ごさせたい時に役に立つ便利な道具であることもわかった。

子どもが時間を持て余した時に使用させる保護者が多いということは、スマートフォンの使用以外に手軽に子どもと遊ぶ方法を知らない保護者が多い、ということも考えられる。

(4) 使用のルール

約9割の保護者は、子どもの使用にあたりルールを

決めている。他の項目に比べて、使用時間や内容を決めている保護者の割合は高く、長時間使用や不適切な内容に触れないよう留意していることがわかる。また、場所を暗くしない、スクリーンに目を近づけすぎないなど視力へ配慮したルールや、大人と一緒に使用するというルールを決めており、保護者の管理のもと使用する配慮がうかがえた。

2. スマートフォン使用に対する保護者の意識

(1) 保護者の気持ち

使わせてはいけないと考える保護者は1割程度であり、7割の保護者は、使用してもよいがやりすぎはよくないと考え、それに伴う視力の低下(46.2%)を懸念していた。また、子どもだけで使用するのはいく感じており、実際に7割の保護者は子どもと一緒に使用する配慮がみられた。まだ、影響がわからないので心配である保護者も16%あり、不安を抱えながら使用させている保護者の存在も明らかになった。一方、悪い面だけでなく、家庭のルールに沿って使用すれば問題ないとする保護者や、他の人と一緒に使用すればコミュニケーションが取れるとプラスにとらえている保護者もいることがわかった。

(2) 保護者が気にしていること(懸念している点)

95%以上の保護者が、子どもの長時間使用を気にしており、夢中になりすぎることでスマホ依存になってしまうことを懸念していた。総務省調査⁽²⁾では、長時間利用や依存に対する不安の割合は約3割であり、本研究の保護者の気にする割合は高い傾向にあった。また、長時間使用に伴う視力低下も90%以上の保護者が気にしており(総務省調査では約6割)視力低下に対する不安は大きい。学校保健統計調査⁽⁵⁾によれば、実際に1.0未満の小学生の割合は調査開始時の1979年から増え続け、2012年以降30%を上回っている。また、幼稚園児も、1979年度に16.4%だったのが2016年度には27.4%になり、ここ10年間20%台後半で推移しており、スマートフォンの使用が視力低下の一因であると指摘している。

回答者143名のうち62.5%の保護者が、ネットでのトラブルが気になると回答していた。総務省調査⁽²⁾でも、約半数の保護者が不適切な情報や画像、課金等のトラブルに接触することを気にしており、乳幼児の保護者であっても保護者の知らないところでトラブルになることを懸念していることがうかがえた。

生活リズムの乱れ(56.9%)、身体を動かす遊びとのバランス(55.1%)、行動や言葉遣いの乱れ(47.4%)といった項目が気になる割合は約50~60%であ

り、保護者による意識の二極化が見られた。また、長時間使用によるコミュニケーション能力の低下や五感を育むことへの弊害も言われているが、気にしている割合は約4割であり、これらの項目に対する保護者の意識は高くないと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究の目的は、乳幼児のスマートフォン使用の現状及び保護者の意識を把握することにより課題を抽出し、今後、必要な取り組みを明らかにすることであった。本研究の結果、現状及び保護者の意識として、以下のことが明らかになった。①1～5歳児の使用率は高く、1歳児の約4割、3歳児の約7割、5歳児の約9割が使用しており、年齢を追うごとに使用率は増加している。②1週間の使用頻度は1,2回以下が7割を占め、ほとんどの子どもの使用時間は1日30分以内と長時間の使用ではなかった。③乳幼児がよく使用する機能は、写真や動画を見る、撮るであった。④9割の保護者は、子どもの使用時のルールを決め、保護者の管理のもとで使用していた。⑤約半数の保護者は子どもが使いたがる時に、約2割の保護者は手が離せない時や外出先で静かにしてもらいたい時などに使用しており、良くないと思いつつも手軽に、あるいはやむをえず使わせている。子どもを静かにさせることができるスマートフォンは、子育て中の親にとって、育児負担を軽減できる便利なツールであることがわかった。⑥使用させている保護者の気持ちとしては、使用してもよいがやりすぎはよくないと考えており、視力の低下や子どもだけで使用することを気にしていた。また、影響がわからないという不安を抱えながら、子どもに使用させている保護者の存在も明らかになった。⑦使用時間や内容、依存に関する意識は高いが、長時間使用と生活習慣や遊びとの関係、コミュニケーション能力や体験の減少による五感への影響に関しては、保護者の意識に差がみられた。

今回の結果において、乳幼児期の子どものスマートフォン使用は一般的になっており、使用が早期化・低年齢化していることが示された。保護者は、子育てにスマートフォンを多用しているのではないかと予測したが、本研究の結果、乳幼児が長時間使用している割合は少なく、ほとんどの保護者は使用時にルールを決め、保護者の管理のもと、節度ある使用を心掛けていることが明らかになった。また、保護者は、子どもの長時間視聴や使用、スマートフォンへの依存、視力の低下等を気にかけて子どもの使用に配慮しており、以上のことを考慮すると、過度に憂慮しなければならないという現状ではないことがわかった。この点に関しては、本研究の調査対象

の特性や地域性が関係している可能性もあるため継続調査が必要であるが、先行研究とは異なる新たな結果を得られたと考えられる。

本研究から抽出された課題と今後、必要な取り組みは、以下のとおりである。課題としては、影響がわからないという不安を抱いて使用させている保護者の存在、長時間の使用が生活習慣、遊び、コミュニケーション能力、五感への影響など多岐にわたる可能性があることへの認識不足、子どもが使いたがる時や静かにさせたい時にスマートフォンを与えてしまう点が挙げられた。こうした課題を踏まえると、今後、乳幼児を持つ保護者への情報提供及び学習の機会を拡大する必要があると考えられる。現在も、ネットでの情報提供や、保護者向けにメディア利用に関する講演会やセミナー、学習の機会が提供されているが、不安を持ちながら使用させている保護者の存在や影響が多岐にわたることへの認識不足という結果を考えあわせると、現在の情報や機会の提供では十分とはいえず、更なる働きかけが必要である。しかし、機会が提供されていても、保護者が行動を起こさなければ情報に触れることができない。8割以上の保護者が子どものスマートフォン使用に関する学習の必要性を感じているが、特に何もしていない割合が半数を占めているとの報告⁽³⁾もあり、乳幼児の保護者にとって実際に行動を起こすことはハードルが高い可能性もある。その点、子どもが通う幼稚園・保育園（こども園含む）での講演会や学習の機会は、身近であり気軽に参加できるという点において有効に働くと考えられ、積極的に推進したい取り組みである。保育者に保護者への働きかけを積極的に行ってもらうためには、養成校（大学や短大も含む）の授業や教員免許更新講習での講座等で本テーマを取り上げ、現状や課題を認識し理解してもらうことも必要であろう。また、1歳児の約4割が使用している結果をふまえると、妊娠期間から保護者が乳幼児のスマートフォン使用に関して学べる機会を提供することが望まれる。

保護者の意識は、長時間使用、スマートフォン依存、視力の低下など直接的な影響に関しては高かったが、長時間の使用が生活習慣の乱れを起こすことや身体を動かす遊びとのバランスに関わること、また、コミュニケーション能力の低下や、体験が減少することでの五感への影響といった二次的な影響に関しては、保護者の意識に差がみられるという結果になった。これらの点については、保護者の理解が進むように、特に働きかけが求められる。

子どもが時間を持て余し使いたがる時や静かにしてもらいたい時に使用させることに関しては、たやすく静かにさせることができるためと思われるが、保護者がスマ

ートフォンの使用以外に、子どもと関わる遊び方をあまり知らないことも考えられる。スマートフォンに頼らず子どもと関われる遊び、例えば、ぬりえ、お絵かき、折り紙、絵本、手遊び等を知ってもらうことも必要だと思われる。

本研究では、保護者が子どものスマートフォン使用に配慮していることがうかがえたが、子どもへの影響を考え、保護者自身が使い方に留意しているかに関しては調査不足により把握できなかった。子どもが話しかけているのにスマートフォンの画面を見ながら対応する、適当に返事をする、大人がスマートフォンに夢中になり子どもが何をしているのか気づかないなど、子ども自身が使用していなくても子どもに影響することは多い。今後、保護者自身の利用習慣も調査し、親の使用状況が子どもに及ぼす影響についても明らかにしたいと考える。また、本研究の限界として、調査対象の選定に際し考慮していないため、調査結果の解釈に選択バイアスがある可能性がある。今後、地域性を考慮し、対象者を増やしての検討が必要である。

謝 辞

本研究にあたり、アンケートにご協力いただきました保育園、幼稚園の先生方及び保護者の方々のご協力に感謝申し上げます。本研究は、平成27年度、及び28年度の卒業研究として収集したデータを再解析したものです。中村学園大学教育学部学生、中村明日香さん、西原彩香さん、川端芹奈さん、野口恵梨子さんのご協力に感謝いたします。

引用・参考文献

- 1 総務省 平成29年度版情報通信白書 2017
- 2 総務省情報通信政策研究所 未就学児等の ICT 利活用に係る保護者の意識に関する調査報告書 2015
- 3 子どもたちのインターネット利用について考える研究会 未就学児の生活習慣とインターネット利用に関する保護者の意識調査 2016
- 4 日本小児科医会 <http://www.jpa-web.org/> 2017年8月27日アクセス
- 5 文部科学省 学校保健統計調査 2016
- 6 総務省情報通信政策研究所 子どもの ICT 利活用に係る保護者の意識に関する調査報告書 2014
- 7 インタースペース 子どものスマートフォン利用調査 <http://www.interspace.jp/press> 2014